

目次

「日之影の宣教師」

御神 (おんかみ) エホバ アミタイの子ヨナに託して曰 (いわ) く 汝 (なんじ) 大 (おお) いなる町ニネベに急ぎ行 (ゆ) きて 彼 (か) の悪 (あ) しき民への警鐘となるべし
その悪 我に挑みかからんとするなればなり されどヨナ 御神に逆 (さか) らいてタル
シンに向かう 『旧約聖書「ヨナ伝」第1章1節-3節』

第1章

神の声を聴いて宣教の使命を受け来日したという人にあったことがある。短い時間だけだった。だから彼に関する私の知識の多くは彼から直接得たものではなく又聞きであり、よってその詳細と真偽は不明だ。しかし、聞き及んだ出来事を私は真実と信じるのでこれを記録する。

1969年から1975年の6年間、私は宮崎大学工学部工業化学専攻の学生として宮崎市に滞在した。(6年間いたのは2年間留年したため。) 工学部から道一つ隔てたところに小さなメノナイト系の霧島町キリスト教会があり、そこに私は卒業までの2年くらいかよっていた。カナダ人の宣教師夫妻がいて、初めは英会話の勉強のためにバイブルクラスに参加していたが、やがて神を感じそのインスピレーションに従って聖書を自らの言葉で和訳もしていた。

1975年の3月、すなわち卒業が近づく頃のある日曜日の朝、日曜学校の新米教師になっていた私は、子供たちへのメッセージの最後の準備をするため、いつものように早めに教会に入った。

教会は木造一階建てで、礼拝がなされる板床の大広間の他は、玄関と、その横の牧師の長女の住む小部屋とそのとなりの牧師用の書斎、そのとなりの図書室、大広間の反対側にあって4つの滑り戸で仕切られ大広間より一段高くなった比較的広い畳部屋とである。この唯一の和室はクリスマス劇などのステージとしても用いられ、また押入れがあり客人を泊めるためにも用いられていた。

玄関でスリッパに履き替え、大広間を通過して、図書室に入り、荷物を置くと、片手に教師用のテキストを持って大広間を歩きながらその日に話をする聖句を暗記しようと音読を始めた。するとくだんの滑り戸の一つが開き、タオルを持った西洋人の男がひとり現れた。彼は私に笑顔であいさつし握手し、我々は互いに英語で自己紹介した。彼はアメリカ人宣教師で宮崎県北部にある日之影という町から来たと言った。米人にしては小柄でまた宣教師にしては珍しく口数の少ない人であった。彼は私の質問だけに答え私に何かを問うこともなかった。会話は途切れがちになり、彼は間もなく玄関から出て行った。タオルを持っていたので水道設備のある牧師館に洗面に行ったのであろう。短い会話であったが、私が彼と一対一で話をしたのはその時だけだ。そして彼から名刺をもらったのはそのときだったろうか。彼を「セベタ」(匿名)と呼ぶことにする。

セベタが出て行って間もなく、教会の牧師であるカナダ人宣教師が入ってきた。(彼は前のクリスマスに私に洗礼を授けており、のちに私の結婚式をも司ることとなった。) 彼は日本語にほとんど不自由のない人だった。しかしいつものように我々は英語で挨拶し、わたしは当然に最前会ったミスターセベタのことに言及した。そして彼についての率直

な印象を述べた。牧師は彼が教会に宿泊していること、そして彼には一つ問題があることを話した。その問題が何かを話そうとした時、牧師は急に口を止め、顔を赤らめ目を丸くして私を見、閉じられていた滑り戸のほうを指さして、「Is he there now?」と小声になってささやいた。彼はセベタがあ部屋にいないことを確かめないうっかり私に「He has a problem」と言ったので、それが本人の耳に聞こえたのではなからうかという危惧に襲われたわけだった。

私はすぐに「No, he is not there now」と言って彼を安心させた。(セベタが彼の家に行ったことを知らなかったことからして、牧師は家からではなく朝の散歩から帰ってきて、そのまま教会に入ったのであったろう。)

牧師は改めて、セベタの問題について語ろうとした時、今度はセベタ本人が戻ってきた。彼は我々の会話に加わり、今はもうその会話の内容は覚えていない。

日曜礼拝式において、我々は輪を作るように並んだ。すなわち、いくつもの細長い折り畳み式テーブルが長方形の四辺を構成するように並べられ、牧師が上座側の短辺の一つに座り、他の人々が他の三辺に沿って座った。座りきれないときは壁沿いに並べられた椅子に座る。従って、我々はおおかたすべての人の顔が見えるように向かい合う形になった。セベタは私の座った長辺の向かい側の辺で牧師夫人の横に座った。

礼拝式が終わるといつも初めての出席者が紹介され簡単な自己紹介を求められた。セベタも紹介された。しかし彼は自己紹介をしようとしなかった。牧師夫人が何か言うようにと勧めると、彼は一言二言、小声で言った。このとき牧師夫人はつい小さな笑いを漏らした。彼女がこらえきれず漏らした笑いはおそらく彼の問題に関係しているのだろうと私は思った。

礼拝が終わると、みんなが持ち寄った食べ物で昼食会が同じ場所で持たれるのが通例だった。そしてその日も礼拝の後に少なくとも彼のレセプションのような集まりがあったと思うが、私は特にセベタと話したという記憶はない。従ってあの名刺をもらったのはやはり朝の出会いの時だったかもしれない。その後彼と会っていない。そして彼のことを思い出すことも稀となった。また牧師に彼の問題について聞き直すこともなかった。

私は卒業し、宮崎を去り、時も去り、セベタを思い出すのは彼の写真付きの名刺を引き出しの中で偶然見つけるときだけとなった。見つけると、あの朝のことを思い出し、結局彼の問題とは何だったのだろうかと思いが巡る。そして今度牧師に会う機会があったらきっと聞いてみようと思うのであった。

しかしその問題が何であれ、彼のカードを私の聖書の中に入れておくことにより彼がその問題から神によって守られるのだということを念じ(なぜなら私にとって聖書は印刷物であれ聖なるものであるから)、彼のカードをしおりのように私が最も頻りに使っていた英語版の聖書である New English Bible (1970版)に挟んだ。(この聖書から私は英文和訳をしていた。)そうすると彼のカードに接する機会が増え、ますます彼の問題とは何だったのかについて気にする機会も増えた。

セベタの名刺は普通の名刺の2倍の大きさだった。文字はすべて英文である。彼の白黒写真がプリントされている。白人であり、40歳に近いと思われる。メガネの奥の眼は笑っているが、シャイさを隠せていない。しかも彼はこちらを見ていない。カメラの方を見るのではなく自分の右方向に目をそらしている。そのせいか人の目を直視できない気の弱い人

という感じを与える。

眉は薄く、ハンサムというわけにはいかない。体格がいいとも言えない。一人で日本に来たというので、おそらく独身であったろう。写真の下に彼の名前がイタリック体でプリントされている。

彼の写真の横に九州の地図がある。宮崎県内の一点から海に至る線が引かれており、その先に「HINOKAGE」と手書きされている。そしてこの地図の下に「HINOKAGE MACHI MIYAZAKI KEN」と活字がプリントされている。彼の写真とこの地図の上側に「JAPAN FOR CHRIST」とゴシック体の一行がある。

カードを裏返すと、英文字だけが印刷されている。

まず次のような詩のような記載があり、最後に「Isaiah 9:2」とあるので、一見イザヤ書 9章2節からの引用と思われる。

I am in the Land of the Rising Sun with the Love of the Risen Sun Reaching people in the Shadow of the Sun

with the power of the Glorified Son. Isaiah 9:2

これを訳すと、

私は日の昇る地にいる 昇りし日の愛を持って。日の影の内にいる人々に栄光の子の力をもって至らんとする。

しかし調べるとこれはイザヤ書 9章2節と正しくはマッチしておらずセペタの手が加えられたものと思われる。旧約聖書の口語訳ではイザヤ書 9章2節は次のようになっている。

暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。

してみれば、セペタはこの聖句に「日之影」を織り込もうとしたのである。また日本が日の昇る国とも呼ばれることをも織り込んだ。聖句と奥意は同じであるのでセペタの筆力に敬服する。さらに最初の三行は Sun で終わり、最後の行だけは Son で終わる。「サン」と韻を踏んでいる。

この段落の下に、彼は次のようなことについての祈りを求めた。

Please Pray for — SOUND MIND – 2 Tim. 1:7 SOULS REMAINING – John 15: 4-8, 16 STRENGTH – Isaiah 40:31, Nehemiah (sic) 8:10 SUPPLY – Phil. 4:19, 3 John 2 STEADFASTNESS – 1 Cor. 15:58, Gal. 6:9 SPEAKING BOLDLY – Eph. 6:18 – 20

訳すと、

「どうぞ、次のことをお祈り下さい、

健全な心 – 第2 テモテ人への手紙 1:7 精神の落ちつき – ヨハネ 15: 4-8, 16 強さ – イザヤ 40:31, ネヘミヤ 8:10 生活の糧 – ピリピ 4:19, 3 ヨハネ 2 不動心 – 第1 コリント人への手紙 15:58, ガラテア人への手紙 6:9 大胆な語り – エペソ人への手紙 6:18 – 20

彼は自分の弱点をよく知っていて、このような祈りを求めたのであろう。しかしこれら六つの項目は、彼のみでなく、諸々の宣教師はもとより、全てのキリスト者に欠乏しがちのことごとでもある。そして悪魔は我々のそのすきをついて誘惑し、真(まこと)の人をもたぶらかし、一生の重荷を背負わせる。

私は、セペタだけのために時間を割いて祈ったことがあったろうか？ このカードを見て

一つ二つの項目について祈ったかもしれないが、おしなべてこれらをさらっていない。また示された聖句を逐一聖書のページを繰って見に行っていなかったろう。それほど興味しか当時の私はセベタについて抱いていなかった。

さて大学を卒業してからも恩師のカナダ人牧師とは何度か会った。東京、宮崎、福岡、埼玉と少なくとも4回会ったが、その都度、セベタのことについて思い出す前に別れた。しかしいよいよ彼が定年のため牧師職を退く時期が迫った時、私は彼の日本での最後の任地に牧師夫妻を訪ねた。私は41歳になっていた。それはセベタのことを問うためわざわざというわけではなく、もしこの機会を逃したらもう彼と再会することはないだろうと思われたからであり、また彼との間には再会を必要とするより重要な事が残っていた。夫妻の最後の任地は宮崎県でも鹿児島県に近い高城町だった。

私は自転車旅行の計画を立てた。すでに北海道、四国、東北、信州、八丈島、日南海岸、宮古島等、自転車で走っており、出張で行ったワシントンとニューヨークでも自転車を持参し、観光した。だから突飛な計画でもなかった。南九州の懐かしい場所をゆっくり再訪する旅ともいえた。比較的長い休暇を取った。1994-4-27から12日間のセンチメンタルサイクリングだ。テントと寝袋をマウンテンバイクに積んで、自炊のための器具もそろえた。朝夕の楽しみとして小さなオカリナも持参した。仕事、そして旅日記を書くためにポケットサイズのコンピュータも携行した。

羽田から鹿児島空港に着くと山間部を通って、国分市に入る。Do-It-Yourself ショップで燃料缶を二本買い、自転車屋でタイヤに空気を十分入れた。再び山間部に戻り、霧島連峰を目指す。

凶らずも霧島神宮駅に来たので、最初の夜はここで駅寝することにした。夕食はそうめん。茹でていると、一人では食べきれないくらいの量に膨らみ、腹が張り詰めた。

夜になって、公衆電話で、牧師に電話し、都合のいい日に高城教会に行きたい旨伝えると、カナダから客人々が来ているので二日後が都合がよいとのことだった。

最終列車が到着して去ってゆくと待合室にテントを張った。そして待合室の音響効果を楽しみながらオカリナを吹く。中年の婦人がやって来て、きれいな土笛の音色がするのでだれが吹いているのかと見に来た、と言った。缶ビールを飲んで就寝。床がコンクリートのせいか、朝方は寒かった。

二日後、1994年4月29日金曜日、私は無事高城キリスト教会に到着。牧師夫人は外出中で、そのうち帰ってくるはずだということだった。カナダ人牧師と色々な話をする。私が教会に行くのをやめたこともあってか、久しぶりの再会で二人はしばらくは打ち解け合うことはできなかった。そういうことで私はセベタに関する質問と、ある女性に関する質問をどうやって切り出すか難儀していた。冷蔵庫から出してくれたコーラがおいしかった。牧師はまるで私が来たのは夫人に会うためだったかのように、「She should be back soon now.」などと言った。

それでも共通の話題を見つけながらの会話がかなり進んだところで私は思い切ってその女性のことを先に聞いた。夫人のいないときに聞いたほうがいいと思ったからだ。その女性は、私より10歳近く年上だったが一度はプロポーズしようと決心した人だった。

その話が終わると、ついにアメリカ人セベタのことを聞いた。牧師はすぐに思い出してくれた。師の説明によると、彼は「日の出ずる国日本の日之影町（ひのかげまち）」にて

伝道するように、との神の声を聞いたという。彼は、言葉はもちろん宗教的にも十分な訓練を受けることなく来日し、宮崎県の日之影町に部屋（又は家）を借りた。生計を立てるために彼は自宅で英会話教室を始めた。ほどなく、彼は部屋の内側から布とか紙を当てて屋外の光を遮断するようになった。こうして、彼の部屋には日光がほとんど入らなくなった。

彼が部屋を内側から覆った理由は明らかではなかった（あるいは私が聴き損じたのかも知れない。このとき、私たちは英語で会話していた）。日之影の冬は非常に寒かったので、窓に物を貼って部屋をすきま風や冷気から遮断しなければならなかったのかもしれない。あるいは、町民の好奇の目から逃れたかったのかもしれない。当時は、日本ではまだ外国人、特に西洋人は珍しく、好奇心旺盛な日本人の注目を集めがちだった。かつて東京で知り合ったアメリカ人ビジネスマンは、初めて日本に来た頃は、どこへ行ってもじろじろ見られ、ホテルの部屋にもどってドアを閉めるまではずっと落ち着かなかった、と言っていた。都会でもそうなのだから、ましてやほとんどの人が外国人を見たことがない山奥の町では如何やである。そうするとセベタのような内向的な人にとっては自分の部屋を外部の視線から遮断する必要があったのかもしれない。それとも、外国に初めて一人で住む人の中では特に珍しくない、彼が苦しみ始めていたかもしれないある種の精神疾患の症状なのであったろうか？

彼は日之影を神の栄光にさらすべくやって来たが、自らの部屋は陽光から覆い隠してしまった。この不自然な彼の振る舞いの結果（家に帰ってこられ私たちの会話に加わった牧師夫人の言葉を借りると）「He scared his pupils away」すなわち、英会話教室の生徒たちはこれを気味悪がり去ってしまうことになった。

彼の収入源は枯渇し彼は飢えた。（彼が米国のホーム教会等によって経済的にサポートされていたかどうかは知らないが、そうだとでも十分ではなかったに違いない。）ある日彼は近所の店でクッキーを盗み、警察に突き出された。言葉が通じないので警察官はやがて宮崎市にいたカナダ人牧師に電話した。牧師は自動車で行きセベタを引き取った。こうしてセベタはこの牧師のいる霧島町教会にしばらく投宿することになった。そしてあの日曜日の朝その教会で私は彼に会ったわけだ。牧師夫妻は、はじめ彼があまりにたくさん食べるのでとても驚いたという。それほど彼は空腹にさいなまれていたのだ。それを聞いて、あの礼拝後のセベタの自己紹介の時に牧師夫人が不意に漏らした短い笑いは、このことを思い出してのことだったのだなと思った。

これで謎だったことが解けた。クッキーを盗んだくらいで警察に通報するものだろうかとは私は思ったが、その時が初めてのことでなかったのかも知れない。それとも、昔の風習が濃く残る山奥の町とてキリスト教は異教視され、セベタは少なくとも一部の町民から敵意を持たれていたのかもしれない。

さて牧師はさらにその後の彼について付け加えた。

上記出来事ののちセベタは強制的に帰国させられた。その後、彼は再び渡日を試みたが、今度はアメリカの空港もしくは日本の空港の出入国管理事務所で止められた（どちらであったか、私の記憶が曖昧）。日之影町での司法記録が原因だった。こうしてセベタは2度目の来日は果たせなかった。私は、あの内気で気の弱そうな宣教師セベタを思い出し、自らにとって恥辱の地であった日之影に戻ろうとした彼の心意気、行動に敬服した。そ

れは彼がじかに再び神の声を聞いたであろうこと以外には説明がつかないと思った。

彼のその後のことは一切わからない。

時は立ち、私はとある宗教人と会話している時に彼が発した「ヨナの奇跡」という言葉を聞いて、かつて自分が埼玉で教会に通っていた頃、日曜学校の生徒たちと「ヨナとクジラと神さま」という紙芝居を作り、その脚本を私が書いたことを思い出した。そしてあれを小説にしてみよう、と思いついた。脚本を探し出して、それをベースに書き始めた。そうしているうちに、私は預言者ヨナと宣教師セペタを比べるようになった。

本書の冒頭に引用したように、ヨナは神の声を聞いたが、初めそれに背いた。しかしセペタはすぐに神に従った。詳しく述べると、ヨナは、神に、異教の地ニネベに行ってその民の悪の故に町が滅びるであろうことを預言せよと命ぜられるが、ニネベ（びと）を恐れ且つ忌み嫌っていた彼は、神の命に背いて地中海に船客となって逃げ、大魚に飲まれる。祈りが聞かれ生還できた彼は、神の二度目の命に従ってニネベに行く。すると人々はヨナの言葉を信じ改心し、町は救われた。しかしヨナはニネベが救われたことにかえって腹を立てる。一方セペタは、神に日之影に行き行って語れと言われ、当地で宣教を試みるが挫折し、（彼が祈ってくれるよう求めた6つの祈りのうちの）生活の糧を絶たれ空腹のうちに犯した軽罪のため追放され、それでも再び日之影に行き行って語ろうとし、司法に拒まれる。

上述の六つの祈りの目的のうちで不動心については、セペタはひたすら日之影を目指したことから、その点ではひるみは見せなかった。ヨナのように一転二転しなかった。ならばヨナの記録よりもセペタの記録のほうがいっそう輝かしいものになるのではなからうか？ と私は思った。

高城で牧師の話聞いてから、私はセペタの名刺を自分の NEW ENGLISH BIBLE (1970) のイザヤ書9章2節のある818ページと819ページの間に移した。

そこを開くといつも彼が力強い声で呼ぼう。

私は日の昇る地にいる 昇りし日の愛を持って。日の影の内にいる人々に栄光の子の力をもって至らんとする。

そして、これとイザヤ書9章2節の言葉とを交互に並べ合わせると、後者は彼の声の木霊（こだま）のようだ：

私は日の昇る地にいる、昇りし日の愛を持って

暗やみの中を歩んでいた民は大いなる光を見た。

日の影の内にいる人々に、栄光の子の力をもって至らんとする

暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。

第2章

高城への旅行から20数年が過ぎたころ、私は、長らく温めていたセペタに関してのノンフィクションストーリー（おおまか本書の第1章）を書き上げた。同じ頃、預言者ヨナについての物語も推敲を重ねていた。必然、神のこれら2人のミSSIONナリーを比較し、容易に少なくとも態度においてはセペタはヨナよりも優れているという簡単な結論に達した。彼らはそれぞれ二度神の命令を聞き、ヨナは最初のものには従わず、2番目のもの

を聞いて初めてニネベに行った。一方セペタは、両方の折に神の声に従った。だからセペタのことは少なくとも記録に値するものと信じられた。

しかし、それは書く前から自戒していたことではあるが、神の名を傷つける可能性もあるからセペタの話は公表すべきではないと考えていた。いっぼう公にしたいという（自ら卑しいと自戒する）衝動も感じていた。

このように私は執筆しながらずっと自問し、第1章を書き終えた時、すなわち自分が初めにこのノンフィクションストーリーのエンディングと決めていたくだけりを書き上げた時、改めて自問した、セペタについて書いたものを、彼が身をもって証しする強力な呼びかけを、読者に到らしめるべきではないかと・・・もしかして私自身が彼を主人公とする神によるノンフィクションストーリーの一部であったのではないだろうか、・・・それともセペタのことは何の神意もない忘却されるべきことに過ぎないのだろうか・・・。私は今まで意味も趣向もないものを公にすることはなかったが、神意となるとその存否を自分で判断することはできない。

私は神に祈り、尋ねた。その結果、私自身が、セペタが2番目の旅で到達できなかった日之影に行かなければならないと信じるようになった、そこで神の啓示を待とうと。

(余談ながら、私は神の啓示を信じる。私は少なくとも二三度は神から啓示を受けたことがあると信じている。例えば、私が埼玉県のあるメノナイト教会の日曜学校の若い先生だった頃のことで、出エジプト記のモーセについてのあるエピソードを話す準備を、教師用のガイドブックを参考にしながら進めていた。その箇所ではマナが登場します。これは神が天から降らせた食べ物です。そのとき、私は、旧約聖書の記述「蜂蜜で作られたウエハースのような味がした」[出エジプト記 16 章 14 節]に沿ってマナを複製してみるのには良いアイデアではないかと思った。そうして、私はウエハースと蜂蜜を購入し、教会の生徒一人一人のために、それらからマナのレプリカを作ることを計画した。しかし、子供たちにマナを配ろうと思っていた日曜日の朝、家のトイレで便器に座ろうとしていたところ、突然、目の前の壁に向かって嘔吐してしまったのです。そのとき吐き気はまったく感じていなく、私製マナを予め試食していたわけでもありません。青天の霹靂のごとく、この思いもよらない異変が起こり、しかもその間も後も吐き気や体調不良を感じることはありませんでした。吐き気もないのに吐く、このようなことは私にはそれまでになかったことでした。そこで私はこれを神からの啓示ととらえ、子供たちに偽のマナを配る計画をやめました。)

第3章

2018年1月13日、私は、神からの啓示を待つべく、一人で日之影を訪ね、2日間（土日）滞在することになる。

この日程を決め、航空券を確保したのは、ほんの二日前の1月11日のことだった。プラン決定の前に、日之影について、そして東京からそこにどのように到達できるかについて知るため、私はいくつかのインターネットサイトを調べた。飛行機、急行列車、そしてバスの順で行くことが最適であることが判った。また、朝8時頃に羽田空港を出発するフライトを利用すると、バスで13時頃に日之影に到着できることも知った。そして、

私の目を引いたのが、1月13日と14日には日之影ではお祭りがあり、この2日間にわたって夜を徹した「神楽」が行われるということだった。神楽は私が若いころから関心を寄せていた伝統芸能で、いつかは夜神楽を見たいと思っていた。

余談ながら、私が最初に神楽らしきものを見たのは、幼少の頃のことで、父母の出身地である瀬戸内海の高根島の神社であった。境内に観客はござなどを敷いて座って見ていた。私が覚えているシーンは鬼か天狗の面を被った白装束の演者が怒鳴り声でこちらに近づいてきたときのもので、私は悲鳴を上げて逃げようとした。幸い私は標的でなかったらしく記憶はここで途切れる。あとは私が育った広島県三原市の西宮八幡宮で毎年秋に祭りが行われ神楽も演じられ、演目はいつもやまたのおろち退治であったが、その武者の刀を持ってくるくる回る踊りや、演者同士のアドリブの会話の滑稽さにひかれ、これが漫才の原型だったのではなかろうかと興味を持った。

さて、そのようなことで、私はすぐに、二日後の13日に日之影に行き、14日まで滞在することを決めた。祭りの期間中なら多くの人が祭場に集うので、仕事で忙しい週日よりもずっと多くの住人に会うことができる、そしてその日々を選んだのは良い決断であったことがあとでわかった。すなわち、自分も社交的な人間ではないので、他の日々であったらどうてい望めなかったであろう程の人々と会って話す機会に恵まれることとなった。神楽は13日正午から16時まで岩井川神社で行われ、3時間の休憩の後、神社近くの「歌舞伎の館」で14日正午まで夜通し続けられることがわかった。ということで、日之影に着いたら岩井川神社を訪ねてに行くことにした。

13日、羽田から宮崎空港に行き、急行列車で延岡市に行き、そこからバスに乗り約1時間で、日之影町の中心部を見下ろす青雲橋を渡ったところにある青雲橋バス停に着いた。時刻は予定通り13時頃であった。近くに道の駅があった。バスを降りて自動車道を徒歩で下っていく。タクシーを呼ぶこともできるが、歩くことにした。道程で遭遇するのは車だけだった。

町に近づくと、道は日之影川沿いになり、数年前の台風の被害により列車がもう走ることのなくなったオレンジ色の鉄橋が現れる。さらに川沿いに進むと町に入る。そこで日之影川は五ヶ瀬川に合流する。白い橋を渡るとすぐわら工房の館という建物にたどり着いた。寄ってみようと思ったが、ドアがロックされていた。土曜日に閉館しているのだといつ開いているのだろうと思う。かつて日之影線を列車が走っていた頃は、観光客も少なくなかったろうが、台風の被害により廃線となってからは訪れる人も少なくなり、ずっと閉館状態になっているのであったろうか。

そこからすぐに、「ひのかげ観光案内所」というのがあった。スライドドアの透明ガラス越しに、中年の女性たちがいるのが見えたので、ドアを開き、岩井川神社へ行く道を尋ねた。テーブルの周りの椅子に座った女性たちは、お茶や漬物などを囲んで午後のおしゃべりを楽しんでいるところで、おおかたは私よりも年配のようだった。神社への行き方を親切に教えてくれ、私が徒歩できたことを知ると、お茶でも飲んでからいくようにと薦められた。こうして、私は彼女らの話に加わり、熱い緑茶とおやつをご馳走になった。私が東京からやってきたと知ると、彼女らは驚いた様子で、なぜこんなところに来たのかと問うた。

そこで私は、まずこの地の古き良き神楽（彼女らは「おおひと」神楽と呼んでいた）に

惹かれて、それを観賞するために来たと答えた。次に、その時から 43 年前に私が宮崎市で会ったアメリカ人宣教師セベタについても説明した（もちろん彼の本名を用いて）。そして彼の日之影町における足跡を調べに来たのでもあることを伝えた。しかし残念なことに、彼女らのうちで彼を知っている、あるいは彼について何か聞いたことがあるという人はいなかった。

たまたま私が溪谷を下りていくのを、車から見たという女性がいて、彼女がこの観光案内所を出る 3 時まで私が待つことができるのであれば、岩井川神社まで車で送ってあげようとして申し出た。私は喜んで彼女の申し出を受け入れた。

その時まだ 1 時半ぐらいだったので、私は近くの温泉センターで時間を過ごすことにした。だれであれ、祭に加わる前に体をきれいにしておくことは適切である。このセンターは今では機能していない日之影駅を一部改装したものである。2005 年の台風による洪水によって 2 つの鉄橋やその他の施設が破壊され、鉄道会社は事業を放棄し、日之影線はほぼ全体が廃線となった。日之影駅にたまたま停車していた列車が残され、今ではレール上のプチホテルになっている。そして近くの壁には列車の時刻表がまだ残っていた。まるで時が来ればいつでもベルが鳴り響き、列車が客を乗せて出発できる用意ができていることを誇示しているかのように。

今まで歩きながら目にした日之影の町の建物の中で最も立派と思えたのはこの駅であった。しかしそれが本来の役には立たなくなってしまっていること、それが日之影の町の閑散を象徴しているようにも思えた。（私はこの章の執筆をしながら Google マップのストリートビューで私の歩んだ道をなぞってみたが、ひのかけ観光案内所すらすでに写真屋に代わってしまっていた。）

さて、温泉につかってのんびり時間を過ごそうと思っていたが、私には湯が熱すぎてゆっくりつかっていることはできなかった。そこで早めに出てセンター内の売店で祭りに奉納するための焼酎を買うことにした。これはインターネットで一般に夜神楽を見る場合にわきまえておくべきエチケットの一つとして挙げられていたからだ。しかし適当なものが見つからず、道すがらに店もなく、結局手ぶらで観光案内所に戻った。

新たに集まった人が二三人いたので、再びセベタについて説明し問うたが、彼を知ってはいなかった。まだ時間があつたので、近くに酒店はないかと問うと、すぐ横の道を上っていくとあるということだったので、そこに行って一升瓶を一本買った。ふつうは 2 本奉納するらしかったが、案内所の所長とおぼしき婦人が一本でいいよ、と言ってくれたので従った。

案内所に戻っても 3 時までまだ時間があつたので、神楽のことをいろいろ質問していると、ほとんどの町民は神楽を見に行くのは二日目でもそれよりポピュラーな演目が演じられる終盤だという。

3 時になって、前述の女性に車で送ってもらい、比較的新しい大き目のコミュニティセンターといった感じの「歌舞伎の館」に連れて行かれ、彼女によって私は東京から来た人として紹介され、私は焼酎一升を奉納した。彼女はまた明日くるので、タイミングが良かったら車で青雲橋のバス停まで送ってあげましょうと言ってくれ、去っていった。彼女によると、日之影は、坂道が多いので、不自由のない生活を送るためには車が必要だという。セベタは車は持っていなかったからおそらく自転車で行動したことであろう。道

のほとんどが傾斜しており、当時はほとんど舗装もされていなかったから、彼は、特に空腹のときには、大変つらい思いをしたことだろう。

そこから長い石段を、聞こえてくる太鼓の音を聞きながら登って大人（おおひと）神楽が奉納されている岩井川神社に至った。たくさんの方が見学しており、多くが手にスマホなどをもって撮影していた。私も写真やビデオを撮った。特に太鼓と木の板（ウッドプレート）をたたくコラボレーションが始まるとひかれてその近くに行き動画を撮った。（岩井川神社での神楽演奏、太鼓はK氏：<https://www.youtube.com/watch?v=MlhkmAhq-uw&t=2s>）

すでに日も落ち始めており、温度がずいぶん低くなってきていたので、私は手袋とマフラーをした。社殿で神楽を演じている人たちはそれほど防寒性のない白い衣装を着ており、舞の出番を座って待っていたある若い演者は、寒さに震えていた。

そこでの神事や神楽が終わると、演者らは行列を構え、神社の石段を下って行く。先頭は神主のいでたちの年配者で横笛を吹きながら進んだ。それに続いて種々の面を被った男たちが太刀などをもって踊りながら進み、次に面を被らない青年らが続き、後尾は中学生と思われる男子たちがまだ習いたてと思われる踊りを舞いながら進んでいった。歌舞伎の館の広い駐車場の横の広場に入り、全員で神楽が舞われ、神楽の第一部が終わった。第二部は暖房されたこの建物で開催されたが、外は極寒のため室温が十分上がらず、神楽が奉納上演される大広間（大研修室）では、床は一面たたみが敷かれていたものの、私もだが、帽子やマフラー、手袋を外さない観客が多くいた。そこにはステージはなく、出演者は観客と同じフロアで神楽を演じる。床面に固定されたテープまたは縄の境界線だけが、演者のエリアを区切っていた。しかし動画を見ていただければわかるが、興奮した演者が観客席に躍り出ることもある。

第1部と第2部間の3時間の休憩タイムは、連続して行われていた神楽が途切れる唯一の中休みであった。そしてこの時間が私にとって本来の目的を達する貴重な時間でもあった。この間、大広間では細長い折り畳み式のテーブルが並べられ、夕食のもてなしがあった。焼酎もたくさんふるまわれた。

私は、セペタを覚えている人を見つけたくて、周りの人に話しかけようと気合を入れた。しかしその必要はなかった。来場者の多くは日之影の住民で、よそから来た人も多かれ少なかれ定期的にこの祭りに来ている人たちであるらしく、互いに顔見知りのようであった。したがって、彼らが見知らぬ新参者（よそもの）は私を含めかなり少数であったらしかった。しかも私が東京からはるばる来たことを聞き及んでいる人もあって、私はすでに興味の的になっていたようだ。こうして、私の近くに座った人たちから焼酎をすすめられ、すすめられるままに飲んだ焼酎により気持ちも口も軽くなっていき、返杯をしながら神楽や日之影のことについて質問し、機会を捉えてセペタのことを語った。その機会とは、私がなぜ日之影を知るようになったのかについて問われる時だった。私は宮崎でセペタと出会った時のことを語った。しかし私の近くで彼のことを知る人はいなかった。

43年というのは、私のそばに座っていた多くの人にとってはほぼ生涯というか、それ以上の期間であり、私が頼りになるのは50歳以上の人であった。

私の斜め前に、私よりも年上に見えるご夫婦が娘さんを間にして座っていた。すでに、

ご夫婦は別の町に住んでいて、娘さんが日之影に嫁いだのでこの祭りには毎年来るのだということは教えてもらっていた。したがって、三人ともセペタを知らなかった。夫のF氏はとくに頻繁に私に焼酎を注いでくれ、私はその都度ポットから湯を注いで薄めた。夕食の時間帯が過ぎ、食器やテーブルが片づけられ始めると、私はF氏に誘われ厨房の横にある中広間に移って飲食を続けた。まだ第2部が始まるまで時間があつた。

すると、中年の男性が部屋の中に現れ、Fさんの親友ということで我々の座っていたところに来てくれた。すぐに私は彼（Kさん）が岩井川神社の神楽で太鼓をたたいていた人だと分かったので、彼のばちさばきを称賛し、あのウッドブロックをたたいていた若者も上手だったと誉めた。そして外はとても冷えていて、素手でばちを持つのは大変だっただろうと同情した。するとK氏は、寒さが出演者を刺激し、気持ちを高揚させるのです、などと語った。

F氏は、K氏が町会議員であり、日之影の由緒ある大人神楽の保存を推進する会の重要なメンバーであると言った。話題はやがて私のことに移り、私は自分のこと、なぜ日之影町に興味を持つようになったのか、そして43年前に日之影町に住んでいたアメリカ人宣教師のことを話し、私の話に耳を傾けてきていた周りの人にも聞こえるように、彼を知っていませんか、とK氏に尋ねた。

一人の私の知らない西洋人の名前をあげた後、K氏は、中学校で英語を教えてもらったアメリカ人宣教師がいたことを思い出した。そしてファーストネームを憶えていた。それは憶え方があったからだ。「酒もたばこもノーマン」と呼ばれていたと愉快そうに言った。その時私ははっとした。セペタのファーストネームがNormanだったからだ。間違いないと思った。(今では、日本の中学校では、どこでもネイティブスピーカーが英語のアシスタント教師として教壇に立つが、当時はまだ導入されてないシステムだった。だからおそらく国庫からのサポートがなく、ノーマンには大した収入にはならなかったであろう。) 私はK氏とF氏に感謝した。日之影に来たことがやっと報われました、と。K氏にノーマンのことをもっと聞きたかったが、彼を知る人が一人二人とやってき、それらの人との会話に、特に神楽についての話に忙しくなってしまう、私が彼を独占することはできそうになくなった。

やがて、神楽が再開される時間が迫ってき、K氏は席を立った。しかし私は満足していた。K氏との幸運な出会いに私の日之影旅行の成功を感じた。まるで日の影の中で光を見たという感じだった。

この幸運のおかげで、その後はリラックスできたし、ノーマンを知っているかもしれない他の人を見つけるために特別な努力ももう払わなかった。

さて、神楽の演目は延々と続き、深夜に熱々のうどんがふるまわれ、これにより眠気をもよほした。毛布にくるまって床に横になったり、寝袋の中に入ったりして寝る人も増えてきた。そこで私も前日に購入して持参していた寝袋に入り、太鼓の音にもかかわらず、焼酎やうどんによる催眠効果でぐっすり眠り込んだ。目が覚めたのは翌朝6時頃であつた。

夜を徹して神楽保存会の26人の演者たちは眠気と疲労をものともせず、それぞれの演目をこなしていた。中には2時間近い長さのものもある全部で28ある第2部の演目も佳境に近づきつつあつた。私は目覚めた後も、寝袋から出れず、右の手のひらに頭を載せ

て神楽を鑑賞していた。すると次第に観客が増えてきて、周りに座りだしたので、とうとう起き上がった。後ろの壁まで下がり、持参していた三脚椅子を出してこれに座り背を壁に持たせて、鑑賞を続けた。車に乗せてくれた夫人が言っていたように、地元の人たちが佳境の演目を目当てに集まってきていたのだ。

昨日F氏と行った中広間に行くと、ご飯と味噌汁と漬物の朝食が用意されてあった。このころには、やはり焼酎は2升奉納すべきだったかと思われた。玄関のそばで販売されていた地元産の蜂蜜を1ビン購入した。これは固形化していたが、濃密でおいしかった。大広間に戻ってみるとさらにたくさんの人が集まっており、立って見ている人も少なくなかった。このころの演目は確かに動きの激しいものが多く、大人神楽が、暴れ神楽と呼ばれるゆえんのアクションものが演じられていた。そこで私は一つビデオで撮影した。

https://www.youtube.com/watch?v=DelXetr_R_Y&t=202s

演目がすべて終わった昼頃、大広間で前日に車で送ってくれた婦人と再会し、改めてお礼を言った。すると彼女は「すぐに出れるなら、バス停まで乗せていってあげますよ」と言ってくれた。私はそれを受け入れ、早速出立の準備を済ませた。こうして私は知り合った人へのおいとまの挨拶もほどほどに歌舞伎の館を去った。

彼女はこうして青雲橋のバス停まで送ってくれた。これだけしてくれたのに、私はお名前を聞くのを忘れてしまっていた。それだけ車中で話が弾んだ。神楽のこと、三度のご馳走と寝袋で寝たこと、そしてセベタ宣教師を知る人に会えたこと。彼女は、あの歌舞伎の館でマージャン教室に参加している、もちろんお金はかけないが、ゲームは認知症防止に役立つのだと言った。お礼を言って彼女と別れたのち、バスが来るまでにはまだ時間があつたので、青雲橋を渡り、日之影の町の写真を撮りながら戻り、道の駅の食堂で昼食を食べた。

バスに乗ると、車窓の風景を楽しもうとしていたのだが、いつの間にか眠りに落ち、延岡の手前で目が覚めた。そして私はすでに、日之影の町のことを懐かしみ始めていた。この二日間は天気が良かったので、町からは日の影というよりは、日の当たる町という印象を深く得た。何よりも会った人々の温かい親切が忘れられまい。そしてはるばる米国から単身で来たノーマン自身も同様のもてなしを受けたに違いないと信じた。

滞在中、彼は神楽祭をはじめ、様々な場所やイベントに招かれたであろう。そしてイベントにつきものの焼酎、さらにはタバコまですすめられたであろう(その頃はたばこを吸わない人のほうが珍しかった)、そして彼はその都度、それらを遠慮すべく、「私は、焼酎もタバコもノーマンです」と答えて自らもみんなも笑わせたであろうか。あの不幸で悲しい出来事があつた後でも、ノーマンは神からの第二の声を聞いたとき、牧歌的な日之影の隣人たちともう一度一緒に暮らしたいと強く願ったのではなかろうか、と私は今では想像できる。

終わり

写真および英語版: <https://www.booksie.com/538285-a-missionary-in-the-shadow-of-the-sun-introduction-and-final-chapter>

後記

最後まで読んでいただきありがとうございました。さて、読者の皆さんの中には、主人公の匿名「セペタ」についてあまり聞き覚えのない名なので、実はこれはノーマンの本名であるのではないかと思う人がいるかもしれません。しかし違います。セペタはスペインあるいはポルトガル系の名で、アルファベット表示では Zepeda となります。私は興味があったので、Norman Zepeda でサーチするとその名の人が米国に少なくとも二人居ました。しかしもちろんノーマンとは別人です。また彼の本名の Norman Xxxxxx でもサーチするとこちらはもっとヒットしました。しかし彼らしい人はその中にいませんでした。それで彼が今どうしているのか、存命なのか、私にはわかりません。

次に、では私がなぜこの日本人にとって聞きなれない、また米国でも珍しい名であろう、セペタを彼の匿名に選んだのかについて興味を抱く人がいるかもしれません。実は実在する人の名を借りたのです。昔私が野球を愛する少年だった頃、サンフランシスコ・ジャイアンツが大リーグチームとしては初めて来日し、読売ジャイアンツ（当時私はジャイアンツ・ファンだった）と何度か試合をし、テレビでも中継されました。そこにセペタ選手がいたのです。他に私はあと 5、6 人のメンバーの名を記憶しました。その中には、のちに野球殿堂入りする名打者メイズも含まれます。子供の頃覚えたこれらの名の記憶は消えず、それらから本書の主人公の匿名としてセペタを他意なく、任意に選んだのでした。

しかしここで妙なことが生じました。セペタを選んで本書を執筆しているうちに、有名なメイズは別として、他の選手の名をすべて思い出せなくなったのです。これは記憶について興味を抱かれている人でなくとも興味深い現象かもしれません。記憶の儂さを感じました。それに付け、K 氏が「酒もたばこもノーマン」という連想文により長年「ノーマン」を記憶の奥隅にとどめてこられたことに、感謝します。

{{-
-}}

日之影の宣教師

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
